

北条氏康と禪宗

中 島 亮 一

戦国時代に小田原に出現した後北条氏が、東国において約一世紀、五代にわたつて関東の大半を掌握維持できたことは、彼らの民政に対する分析力、判断力が、旧領主らより一段とすぐれていたからではあるが、むしろその根本的、精神的原理であつた武家社会の清規ともいうべき後北条氏の家法の内容と、その精神的意義に注目すべきであらう。

その早雲寺殿廿一條の第一条に、「仏神を信じ申すべき事。」をおいたことは、早雲をはじめ少なくとも氏綱・氏康の精神的體質を束縛したのである。この家法は氏康までは君臣ともに厳守している。彼らの仏神崇信の具体例をみると、早雲は最初の山城を箱根の塔之峰に築き、大永二年（一五二二）には氏綱はその山麓湯本に、菩提寺として早雲寺を建て、京都大徳寺から以天宗清を開山に招き、大徳寺直末として臨濟宗に帰依した。次いで鎌倉円覚寺仏日庵、帰源院をはじめ、鶴岡八幡宮をも含めて手厚い外護を加え、円覚寺一五三世奇文禪材や、八幡宮快元僧都とも法外の交りを結んで、頻繁に

交流している。天文五年（一五三六）にはついに北条氏一族から円覚寺に入院、後に仏日庵主となつた鶴隠周音が出るに至つた。

さて北条氏康（一五二五～一五七二）の名が独立してあらわれるのは、氏綱の死歿直後の天文十年十一月二日付の大藤文書その他からであつて、氏康廿六才のときである。もつともそれ以前にも彼は父氏綱と常に行動を共にしていた。例えば安房の里見氏に焼かれた鶴岡八幡宮の復興遷宮を天文二年から七年間手伝つており、同十一年には亡父の後をうけて、由比ヶ浜に大鳥居を建造した。その間、氏康は八幡宮で愛染明王護摩を修したり、神馬を奉納したりしている。また氏綱四十九日の作善として一切経一千部書写したり、早雲寺を勅願所とするための勅許を得たりするなど、宗旨を超越して活発に動いていた。

氏康の代になると後北条氏も安泰期を迎え、各方面において充実して来た。すなわち相模の霊山・大山には、古代から

の堅固な勢力をもち、修験をも併呑していた真言密教の牙城大山寺、東関東の尊崇を集めた下総成田の新勝寺、関東の西部に教線を張った武蔵高幡の金剛寺（高幡不動）らの存在は大きく、またはやくから多数の高材逸足を擁していた足柄の大雄山・最乗寺の洞門も、大きな勢力であつた。

特にこの最乗寺一派は嘉吉・文安（一四四〇年代）の前後に、大綱明宗、春屋宗能の二雄が出るに及び、山外への進出を開始した。彼らは最乗寺山内では、一路山内大衆の教育に邁進し、教団の充実に努力、外に向つてはそれぞれ南足柄の大慈院と箱根・宮城野の報恩院の二刹を開いた。この洞門の堅実な歩調は春屋門下の安叟宗楞が継承し、文安前後に小田原・久野に総世寺を、また同じく早川に宝善院（現・海蔵寺）を開き、いずれも当時の小田原城主大森氏頼の外護するところとなつていた。続いて宗楞の法弟璽叟宗俊が、伊豆・下田にあつた一草庵を寿福寺としたが、その四世実堂宗梅が天文十五年（一五四六）頃、これを相模・秦野の西田原に移して香雲寺と改め、氏康の代には伊豆に卅二ヶ寺の末寺を擁するに至つた。これらのうち特に香雲寺と早雲寺とが、後北条氏の宗教的精神と体質にマッチして、彼等の文化形成に大きな影響を及ぼしたのである。

これより前、文明前後（戦国初期）には大森実頼の帰依をうけて、大寧了忍が南足柄・塚原に長泉院を、また布施・仙

波両氏の帰依をうけて、如幻宗悟が平塚・下吉沢に松巖（岩）寺と、藤沢・遠藤に宝泉寺を開き、忠室存孝が藤沢・獺郷に東陽院を、また最乗寺開山了庵慧明の厚木・七沢の庵室、露栢庵を住僧原佐和尚が広沢寺とし、布州東播が伊勢原に保国寺を開くなど、真言山岳密教の牙城、大山寺を脅やかしつつ東進し、遂に臨済の本拠鎌倉を衝かんとする勢いにまで成長していった。そればかりか、これらに先んじて関東平野に向つては、武蔵、上野にも教線は拡げられていたという状況であつた。

もつとも臨済禅の中にも、すでに鎌倉末期から南北朝期にかけて洞門出身者が現われ、なかでも中国僧の宏智正覚五代の法孫である東明慧日の来日によつて、俄かに活気を呈した。彼は建長寺一八世、円覚寺一〇世をつとめ白雲菴を構えて鎌倉の土と化した。その法叔東陵永興も来日、建長寺卅二世、円覚寺廿六世をはじめ、夢窓疎石に招かれて天竜寺、南禅寺に転住した。この他、円覚寺白雲菴、建仁寺洞春菴を本拠とした洞門宏智派からは、建仁寺四六世の月蓬円見、円覚寺卅三世の不聞契聞、同四三世の太虚契充、建長寺八三世、円覚寺六二世の少林如春、円覚寺一二六世の徳標純清などが出て活躍したが、いずれも中国通が多く、永平下の宗風とは全く異なつており、当代中国臨済宗の一方の旗頭であつた古林清茂などの、金剛幢下一派の流れをもうけつたところに特色

があつた。

ところがこれら宏智派を厚く外護したのは、京都に近い越前一乗谷の朝倉氏の他、公家の二条、飛鳥井氏らであつたため、後北条氏としては彼等との競合を避け、宏智派には深い信頼を寄せず、ひたすら菩提寺の早雲寺を通じて大徳寺を窓口として、京都の情勢把握、交流に自信をもつていた節がある。特に氏康の頃の曲直瀬道三、陳外郎、千利休、山上宗二らとの交流が、それを裏付けている。併せて宏智派の混在した鎌倉五山との接触も忘れなかつた。ただ地元の洞門をも外護したのは全く別の観点からであつたことは後述する。

これらのことは他宗の寺院に対しても多少は見られ、寺領の寄進、造営等の施主となり、開基となつて外護したものをみると、相模周辺に限定すると真言宗五ヶ寺、天台宗三ヶ寺、法華（日蓮）宗六ヶ寺、浄土宗六ヶ寺、時宗二ヶ寺、臨済宗六ヶ寺、曹洞宗卅一ヶ寺となり、総計実に六十三ヶ寺に及び、なかでも曹洞宗は断然群を抜いている。ここで禅の二宗について特記してみると、

臨済宗 円覚寺仏日庵・帰源院・東慶寺（鎌倉）・早雲寺（箱根）・宝安寺（厚木）・東漸寺（武蔵杉田）計六ヶ寺
曹洞宗 総世寺・京福寺・香林寺・興徳寺・久翁寺・海蔵寺・最乗寺・善栄寺・西福寺・玉宝寺（小田原）・大応寺（二宮）・香雲寺・浄円寺（秦野）・石雲寺・松石寺・広沢寺・

北条氏康と禪宗（中 島）

宗珪寺・天応院（厚木）・功雲寺（津久井）・竜源寺・紫雲寺・天徳寺・真芳寺（現単立、旧曹洞）（平塚）・竜宝寺（鎌倉）・竜松院・雲松院（武蔵小机）・宝三寺・秋月院（川崎）・竜珠院（武蔵磯子）・伝心寺（武蔵金沢）・永林寺（八王子）
計卅一ヶ寺

となり、この他上野、下総、上総、安房も入れると相当数に上るはずである。ところで何故後北条氏が曹洞宗を厚く外護したのかという問題がのこる。最も熱心であつたのは氏康であつたが、それは父氏綱の遺志であつたと思われる。「新編相模国風土記稿卷之三十四」の「総世寺」の記事がそれを充分裏付けている。

この記事を要約すると、総世寺の開創は文安二年（一四四五）で、開山は安叟宗楞、開基は大森信濃守氏頼であつたが、氏頼は宗楞の俗甥であつた。したがつて大森氏は曹洞宗であつたわけだ。ここに合葬されている三浦義同（道寸）は、明応三年（一四九五）三浦半島の養父時高と不和になり、妻の兄である大森氏頼を頼つて、当時の総世寺二世智海宗哲の弟子となつた。ところがこの三浦氏のお家騒動に目をつけた北条早雲が永正十三年（一五一六）に介入し、時高方に加勢して一挙に大森、三浦両氏を滅ぼし、名実共に小田原周辺の大森領を奪取した。早雲らは無惨にも義同の子三浦荒次郎義意の首を小田原城下にさらした。ところが三年の間、その面相

生けるが如くであつたのを、時の総世寺四世忠室存孝が憐れんで供養したところ、忽ち瞑目して白骨となつたという。永正十六年にあたるが、早雲もこの年に歿している。ところが風土記稿には総世寺の寺宝として注目すべき記事を載せている。すなわち「十王並監齊使者画像十二幅（嘆十王と号す、縁起に、拠に永正中三浦家滅亡の後、三浦の海中に嗚咽の声あり、漁人怪みて網をおろし、此画幅を得、即北条氏に捧しに、当寺は三浦氏因縁あるを以て、寄附ありしと云）。」とある。この記事は奇怪という他ないが、史実を隠くしたのである。この十王図は明らかに中国元時代と思われる秀作だが、これらと殆んど同一の図柄の十王図が、神奈川県立博物館（重文）と大徳寺（重文）にのみあることは注目に値する。而も何れも南宋作といわれている。ここで推測されることは、氏綱が大徳寺から以天宗清を迎えて早雲寺を開創した際に、この十王図が大徳寺もしくはその関係者からもたらされたものと考えられる。ところが永正十六年にさきの義意の首の供養のこと、早雲が歿したこと、氏頼、義同の三回忌に当ること等、重なつたため、気になつた北条氏綱が、両家の怨霊鎮めをはかつて、早雲寺什物の十王図を総世寺に秘かに寄進したのではなからうか。何れにしても十王図の所在が当初の意図に反するため、海中出現として出所を隠くしたに違いない。

怨霊鎮めの思想や方法は、後北条氏に限らず日本の古代か

ら各時代にわたつて戦乱の勝者が敗者に対して行つた供養であり、また同時に先住民に対する懷柔策の一つでもあつたのである。このことは秀吉の子秀頼が後北氏に対して、また同じようなことをしている。戦国武將が仏教や寺院、教団をどう見ていたかを示す一つの典型的な例として、後北条氏と早雲寺（臨濟宗）、総世寺（曹洞宗）の關係は極めて興味深いものがある。

この後の北条氏康の各方面に亘る活躍を見ると、父氏綱が果たしてくれた怨霊鎮め（氏康五歳頃）の靈驗の下に、着実に業績を挙げていつた。家法に掲げられた「仏神を信じ申すべき事」の条文には、以上のような万感こもつた深い意味と内容が含まれていたのである。更に家法にいう「器量のよさ」も、この第一条の理解と実践なくしては成り立たない。特に氏康が名実共に名將たり得たのは、以上の事実を幼少期から見聞したことによつて、深い自覚と判断力を自から培ひ、その思想と信仰の上に立つて曲直瀬道三、足利学校庠主の九華瑞璵、奇文禪材らと交流し、禪儒一致思想を体得、永禄六年全焼した円覚寺に、尼寺太平寺の仏殿移築（現舍利殿）を認め実行させるなど、これらの人々との交流によつて知つた彼等の思想の奥に流れる中国文化の移入を目指したが、志半ばにして歿したのであつた。